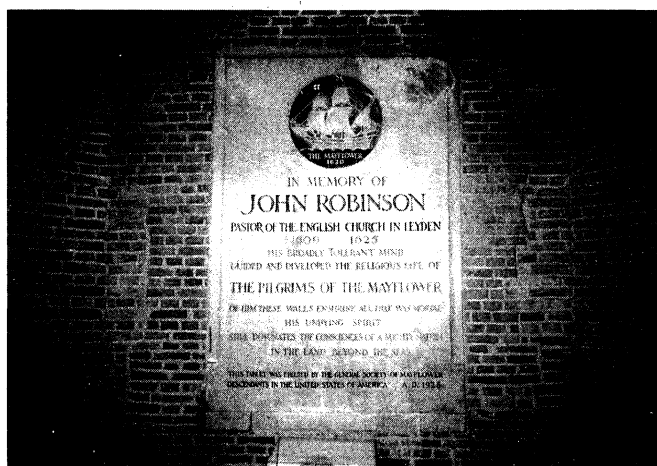


オランダのピューリタン

序論 レイデン

田江 安 廣

(1997年10月14日 受理)



メイフラワー協会（アメリカ）からレイデンに贈られたプラーク。ピーターズ協会の内部にある。



ハーグにあるオルデンバルネフェルト像。

ブッシュ前大統領が多忙なスケジュールの合間を縫ってオランダのとある小都市を訪れたのは1989年7月17日のことである。その都市とはレイデン（又はライデン。Leiden 又は Leyden）と呼ばれる人口11万ほどの大学町である。時のアメリカ大統領の訪問は小国オランダの静かな町にかなりのセンセーションを巻きおこし、地方紙はもとより全国紙にもその様子が写真入りで報道された（アムステルダムの De Telegraaf 紙、ロッテルダムの Dagbladunie 紙、レイデンの Leidsch Dagblad 紙など。レイデンの Leidsch Dagblad 紙、Ruud Paauw 氏の協力による。）

7月17日月曜日10時半にスキポール空港に到着してから翌18日11時50分に同空港を出発するまでの短時間にハーグのビネンホフ（中庭を意味する語。国会議事堂，総理府，外務省などの建物が集まる）を訪問し、レイデンにも立寄ったのだった。前大統領のレイデン訪問にはそれなりの理由があった。イギリスのプリマス港から新大陸にメイフラワー号で渡った人々の中にレイデンで11年をすごしたピューリタンが含まれており、後に彼らはピルグリム・ファーザーズと呼ばれ、建国の父たち（Founding Fathers）と共に、広く世に知られることになるからである。このグループの中に

プリマス植民地の初代総督ジョン・カーヴァー、プリマス植民地の歴史を書き、長年総督をつとめたウィリアム・ブラッドフォード、レイデンで「ピルグリム・プレス」を創設、出版したウィリアム・ブルースター、軍人マイルズ・スタンディッシュらが含まれていたのはいうまでもない。そのうえ、ブッシュ大統領の先祖を辿ってみたところランカスターのスタンディッシュ家とのつながりから、スタンディッシュと縁故があることが判明したというのである。¹⁾周知のようにスタンディッシュはN・モートンの『ニューイングランド・カナーン』やN・ホーソーンの短編に言及される峻厳な軍人である。ブッシュ氏も軍人だったことは何らかの因縁だろうか。²⁾

ブッシュ氏のレイデン訪問は人々にオランダとアメリカとの関わり、特にピルグリムたちについて幾分なりとも認識させる契機となった。訪問10日前の新聞にはピルグリムについての特集が組まれ掲載されたのである。訪問当日、ピルグリムたちとゆかりの深い聖ピーターズ協会でベアトリックス女王による歓迎式典が催され、オランダとアメリカとのつながりが回顧され、その意義が未来に向けて再考察された。

大統領のレイデン訪問は一つのエピソードであるが、英国のスクルービーからアムステルダムを経てレイデンに移住した分離派の足跡も長い歴史を持つレイデンにとっては一つのエピソードである。エピソードであるが故にピルグリム研究の焦点はイギリス本国での当時の政治状況、あるいは新大陸移住後の彼らの行動にあてられ、オランダ滞在時のピューリタン、ピルグリムについて深く触れた研究は多くない。本稿では17世紀の英蘭の関係を概観したのち、大学の歴史を含めて、レイデンの歴史を管見し、続稿でピルグリムを含めたオランダのピューリタンについて考察する。

I

まず当時の英蘭両国の関係について大まかに触れる必要がある。この点に関してK・スプランガーの著『オランダのピューリタニズム』が役立つ。³⁾スプランガーは2度のサバティカル休暇で英蘭両国を訪れ、周到なりサーチによってこの著以外にもオランダとピューリタン関係の書物を著わしている。論述は明快、資料と説得力に富み、楽しく歴史を読ませる稀な学者の一人である。

当時の英蘭両国の関係はどのようなものだったのだろうか。スプランガーはJ.R. ジョーンズやC. ウィルスンらを援用しつつ、英国は他のどの国とよりもオランダとのつながりが深かったことを指摘する。英蘭両国はカトリックスペインと闘争状態にあり、プロテスタント精神を共有し、貿易の取引相手でもあった。女王エリザベスの言葉を用いればオランダは「もっとも古い、もっとも親しい隣人」なのである。

英国人の新大陸移住はよく知られているがヨーロッパ大陸への移住も1650年ころまでには新大陸への移住と同数、あるいはそれを上回っていた。「ニュー・イングランドをとるべきかオランダをとるべきか」迷った末、避難の場としてオランダを選んだ人も少なくなかったのである。その逆にカトリックスペインの怒りを免れるためオランダから英国の諸都市（ロンドン、ノーウィチ、ヤーモス、サザンプトン、カンタベリー等）へのがれたプロテスタントもいた。低地地方のフラマン人

の英国移住は新しい織物の技術を英国にもたらすことにもなった。

今日でもそうだが、オランダには外国人の共同体的要素がある。オランダ連合州 (The United Provinces) がスペインから独立した後、寛容政策をとるようになって以来、さまざまな職種、国籍の人々が流れこんでくる。当時の商業中心地では6～7カ国語がとびかっていた。そこには英国のブラウニスト、ユダヤ人、商人、船乗り、職人、「芳しからぬ」本の著者、非正統派の哲学者がいた。オランダの寛容政策は商売の繁栄と人口増加をもたらしたのである。

当時、英国からオランダへ渡航した人々の職種はどのようなものだったのだろうか。まず第一は兵士であった。スペインに対峙するべくオランダに送りこまれた兵士は1585年以来5,000人から6,000人、1621年までに送りこまれた英国の4個連隊とスコットランドの2個連隊の総数は13,000人であった。

第二はオランダの諸都市に教会というコミュニティーを形成する英国人である。レイデンでは1609年に200世帯が居住許可を求め (ジョン・ロビンソンに率いられた分離派のグループ)、フラシングでは1619年に128、ユトレヒトでは1623年までに120、デルフトでは1636年に70の世帯が居住許可を求めた。アムステルダムでは1623年までに、ある一つの教会員数は450人に達していた。これは6つある教会の一つにすぎないのである。英国と何らかの取引のあるオランダの都市には必ずと言っていいほど彼らの“Engelse kerk, Engelse huis, Engelse kaai”が見うけられハーリングェン (オランダ北部フリースラント地方の小さな町) の売春宿にすら英国人のしるしが確認されたのである。

軍人、非国教徒の他にオランダに渡った英国人は営利を目的とした商人、労働者、そして学生である。もともと英蘭は貿易で経済的なつながりがあったが、17世紀オランダの海運力は例えば1670年においてさえ、英国、スペイン、ポルトガル、仏、スコットランド、独を合わせた船舶数を上回るほどであった。英国の大陸との商取引は冒険商人 (Merchant Adventurer) に掌握されていたが、他にもオランダでひともうけしようと渡航する商人や職人がいた。彼らは「信仰の自由」の名目の下にオランダに渡り、家族をよびよせた。

オランダに渡航した学生たちが第一に選んだ大学は1575年に創立されたレイデン大学であり、次が1585年創立のフラネカ大学だった (ナポレオン侵攻の際に1811年廃止された)。1575年から1675年の間におよそ950人の英国系の学生がレイデン大学に入学している。フラネカ大学は地理的に必ずしも恵まれなかったがウィリアム・エイムズが1622年から33年まで神学教授をつとめたこともあって1年に2～3名が集まったとされるが実数はそれより多いとスプランガーは考えている。1636年創立のユトレヒト大学も1660年後、多くの非国教徒の英国、スコットランドの学生を集めた。オランダのカルヴィン神学は英国のピューリタンにとって魅力的だったのである。

総じて言えば、英蘭両国の関係は17世紀に三たび砲火を交じえたとはいえ、その関係がとりかえしのつかない決定的な破綻をきたすまでには至らなかった。

II

英国人どうしの争いやスキャンダルの多いアムステルダムからジョン・ロビンソン一行が移住したレイデンとはどのような町だったのだろうか。一行の移住の動機を推し計るためにも、当時の生活状況を知るためにもこの点は重要である。

16世紀にローマの道路地図が発見されたとき、ライン河口のルフドウヌム (Lugdunum) という名の土地にローマ人が居住していたことが記されていた。ルフドウヌムが正確にどこにあったのか議論されるが、ハーグ西近郊のロースドーンカレイデンの西北近郊ラインスプルフとヴァール川の間 に設けられた50ヶ所の防衛地点のうち、最も重要な拠点が恐らく現在のレイデンにあると『オランダ史』のブロールは推測している。⁴⁾

レイデンの歴史は10世紀になり活気づく。⁵⁾ ユトレヒトのビショップたちによる支配に入った時期である。このころ二つのライン川支流の間の小島に洪水その他の危険からのがれるため人工の丘が作られた。オランダ国土の37,000平方kmは海面下にあり堤で水の侵入を防ぎつつ、ポンプで排水して水位を一定のレベルに保たなければオランダの全人口の3/4にあたる人々が住んでいるブレダ、ユトレヒト、ズヴォレ、クローニンゲンなどは海面下に没してしまう。もともとホラント Holland は「くぼ地」を意味する語であるが、オランダの最高地点でも海拔321mにすぎない。往時は堤防に見張りが置かれ、怠れば処刑されるほどであった。人々は水のおかげで暮らしている (thanks to water) が、オランダでは「水に抗して」 (in spite of water) 暮らしているのである。⁶⁾ かくして水はオランダ人の生活、性格を規定する最大の要素となる。

さて人工の丘に防壁が建設され、このそばに村が形成される。1050年ころ、この村が現在のレイダードープの昔の名 (Leithon) を奪って、現在のレイデンとなったのである。11世紀後半、ホラント伯がレイデンに居住し、レイデンの将来が約束されることになる。

1100年ころになるとレイデンではライン川の水位を何とか調節できるようになる。数多くの堤が建設されたが、これはレイデン市全体の協力によってはじめて可能であった。これがこの地区の water board のはじまりであり、後に Polder and Dike Board of Rijnland と呼ばれるようになる。今日、この water board が水位の調節、水質の管理について責任を負っている。水位が調節できるようになれば人が集まってくるのは自然の勢いである。まず漁師ついで職人たちが集まり、靴、衣類の売買が行われる。この結果この地区の最も重要な市場となる。これに加え、1247年ウィレム2世はドイツの支配者となりレイデンはホラント伯を支持していたこともあって多くの特権を与えられた。ある種の免税措置はその一例である。人口は着実に増加した。産業の中で最も重要な位置を占めるのが織物業で、レイデンの織物は質の高さから内外に知られるようになる。

しかしながらレイデンの人口を阻止したのは黒死病の流行でこれは1350年から市民を襲ったものである。1500年には織物業が沈滞し、人口は減少し、町の発展に打撃を与えた。その後の人口についてはG・パーカーの名著『オランダの反乱』に詳しい。⁷⁾ 同書によれば1514年の北ホラントには79,000人、南ホラントには194,000人が居住し、これが1622年には北は188,000人 (138%増)、南は

482,000人（156%増）を示し、1622年の南北の人口の総計は670,000人で、その44%が425の村に住み、56%が28の町に居住していた。このとき人口で第2位を占めるのがレイデンで1570年12,000人であった人口が1640年には65,000人にまで増加する。これは織物業の繁栄が原因で、1570年には年間500反の生産量だったものが次の10年間に3,500、1620年には10,000反にまで増産を示している。ここで注目すべきは移民がこの産業において果たした大きな役割である。レイデンには1580～1630年の間に10,000人以上の移民が居住しその半数はフランダースの織物業の町の出身者であった。1580年の調査によれば40%がレイデン市以外の出身者であるとパーカーは述べている。

次に触れるべきはレイデンにまつわるもっとも有名なエピソード、即ちスペイン軍によるレイデン包囲と解放についてのエピソードである。⁸⁾

スペイン王カール5世の寵臣であったウィレムはカールの息子がフィリペ2世として即位した後、次第に疎んぜられるようになる。王位を退くあたってカールが息子に与えた忠告はオランダの統治にあたってはスペイン人は要職に就かずオランダ人に任せることとし、その職名まで具体的に示した。ヘント生まれのカールには低地地方は彼の生まれ育った土地であって、彼自身の言葉によれば10度もこの土地に足を運ぶほどだった。しかしフィリペ2世は自国の側近をのみ重用し、ウィレムは自国の事柄に関してつねに座敷に置かれることになる。ウィレムの伝記作者ウェジウッドによればフィリペとウィレムが出会ったのはフィリペ22才、ウィレム16才のときであるが、二人は性格において水と油だった。フィリペが内気、どもりがち、神経質、理論家だったのに対し、ウィレムは自由闊達、自信にあふれ、健康に恵まれ、実務的だった。二人をつなぐいかなる橋も存在しなかったのである。そのうえ、フランス王から、アルヴァ公を用いてオランダのプロテスタント教徒の殺戮計画があることを知らされたとき、オランダ生まれでないウィレムもはじめて、彼を愛する「粗野で、頑固で、活力に富む国民」に対して愛情を感じた。臣下としての忠誠の義務か、生まれ故郷のディレンブルクで教えられた道德規範のどちらかの選択を迫られたウィレムは王よりもオランダ人民を、忠誠よりも道德的善を選んだのだった。

スペイン軍によるレイデン包囲は1573～1574年であるが、ハールレムは1573年7月11日に陥落していた。アルヴァ公はオランダ人の憤激を考慮してハールレムに対し寛大な措置をとるよう息子に命じていたが、彼は父の命に従わず、すべての軍人と選び出した市民合わせて2,000人を処刑した。この時以降、「降服」の文字はオランダ人にとって無縁となった。しかしナールデン、ズマトフェン、モンス、ハールレム陥落でウィレムは手袋をしたまま戦っているのかと批判を浴びることになる。アルヴァ公の息子がアルクマールに侵攻した際ソノイは一計を案じ堤を破壊してスペイン軍を撤退させることに成功する。1573年10月12日のことである。

レイデンの一次包囲の際、包囲に備えて食料の貯えがあったため持ちこたえられたが、スペイン軍が急に撤退したため多数の市民は安心感からウィレムの忠告を無視して食料の貯えを怠った。再度の包囲に食料は底をつきレイデン市民はねずみの肉、ゆでた動物の皮、木の皮などを食べてよく持ちこたえた。「主は与えたもう」という言葉（現在、市役所の壁に刻まれている）を信じるかの

